



伝統のベルギーレースは大変な手仕事だ

ベルギーについてこんな長く書くつもりはなかった。福岡アムステルダム直行便が売りのツアー、オランダが中心になると思い、事前に司馬遼太郎

の「オランダ紀行」を読んだ。旅行日程がベルギーから始まったせいも多少あるが、ベルギーは予想以上に魅力あふれる国である。四国よりも少し広い、小さな国だが、オランダ語圏、フランス語圏、ドイツ語圏からなる。一八三〇年にオランダから独立以来、言語、人種、宗教によって国内に紛争などは一度も起きていない。今はNATO（北大西洋条約機構）の一員だが、一時中立を宣言したことがある。スペイン、フランス、ドイツをはじめオーストリアやオランダの一部であったという歴史から、今は宗教や民族問題にも寛容で、小粒ながらヨーロッパの心臓として中世の面影を色濃く残す美しい国である。

具体的には小便小僧以外何も知らなかったが、調べてみると、好きな「雪が降る」のアダモがベルギー人と知る。妻にも「何か知っているか」と問うと「レース編み以外知らない」と言う。そういえば、訪れたブリュッセル、ブルージュ、アントワープのどこにもベルギーレースの専門店や土産店があった。レース編みはイタリアからルネッサンス期に伝わり、十八世紀にベルギーレースが確立、膨大な時間と手間がかかるため、一時は宝石よりも高価になったという。ベルギーダイヤモンドには関心を示さない妻もベルギーレースは欲しいらしい。しかし、もう身辺整理をする年齢だから買物にはしないという約束をしたので、思い出にとレース編みのしおりを買っただけ。伝統の技のレース編みは高いが、最近では機械編みのものが多く出回っているという。

さて、最後に食べ物であるが、私はツアーでの食事には全く期待しない。食通でもないが、食事を楽しむならクルーズツアーだろう。食事は味もさることながら、ゆったりとした時間と雰囲気が大切だ。ツアーは一度に大量の人が短時間に食べる

ことが多い、これでは名物料理も泣いてしまう。司馬遼太郎のオランダ紀行に「カトリックのフランス、イタリア、ベルギーは料理が発達したのに対し、プロテスタントのイギリス、ドイツ、オランダは料理がま

ずいといわれている」とある。そういえば、英国に行く

ムール貝の量に驚く

「ベルギー編」の終わりに
ベルギー編⑧



あるが、私はツアーでの食事には全く期待しない。食通でもないが、食事を楽しむならクルーズツアーだろう。食事は味もさることながら、ゆったりとした時間と雰囲気が大切だ。ツアーは一度に大量の人が短時間に食べる

ことが多い、これでは名物料理も泣いてしまう。司馬遼太郎のオランダ紀行に「カトリックのフランス、イタリア、ベルギーは料理が発達したのに対し、プロテスタントのイギリス、ドイツ、オランダは料理がま